

○東北地方におけるオタカラコウとトウゲブキの分布について (加藤 辰己)

Tatsumi KATO: Distribution of *Ligularia fischeri* and *L. hodgsonii* in Tohoku district

オタカラコウ *Ligularia fischeri* (Ledeb.) Turcz. とトウゲブキ *L. hodgsonii* Hook. f. は、オタカラコウの高山型とされるカイタカラコウ *L. kaialpina* Kitam. を除けば、日本のメタカラコウ属植物の中でも互いに最も近縁であると考えられている (小山, 植物分類地理 22:75-80, 1966)。このうち、形態的変異の著しいことでも知られるオタカラコウは、日本を含む東アジアから東シベリアおよびヒマラヤにかけての広い地域に分布している。日本では九州から東北地方南部にかけての主として山間溪流沿いによく見

られるほか、樺太にも分布するが、北海道と東北地方北部からは知られていない。一方、トウゲブキはオタカラコウの分布の空白域である北海道や東北地方北部を中心に、千島・樺太にも分布しており、植物地理学上、大変興味深い分布パターンを示している。しかし、本州における両種の分布の接点にあたる東北地方での細かな分布の状況については、標本資料が不足していたこともあって必ずしも明らかではなかった。

この問題について小山 (1966) は、本州におけるオタカラコウの北限を月山山麓、トウゲブキの南限を月山の標高 1500 m ぐらいの所とした。オタカラコウの月山山麓というのは、当時の標本資料から推測して、山形県西村山郡本道寺村志津 (現在の同郡西川町志津, Fig. 1, F) からもたらされた標本に基いたものと考えられる。この見解によると、オタカラコウとトウゲブキの分布域は、平面図上では月山附近で隣接するが重なり合わないことになる。

その後、標本資料が蓄積されるにつれて、オタカラコウについては志津よりも緯度的にやや北にあたる銀山温泉 (山形県尾花沢市, Fig. 1, E) などにも、トウゲブキについては月山よりもさらに南の朝日連峰

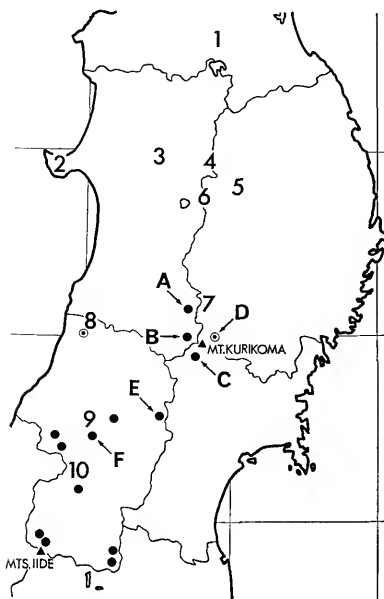


Fig. 1. Distribution of two species of *Ligularia* in Tohoku district. 1-10: Localities from which herbarium specimens of *L. hodgsonii* are derived. 1: Mt. Hakkoda, 2: Mt. Kenashi, 3: Mt. Moriyoshi, 4: Mt. Hachimantai, 5: Mt. Iwate, 6: Mt. Akita-Koma, 7: Mt. Yakeishi, 8: Mt. Chokai, 9: Mt. Gassan, 10: Mts. Asahi. ●: Localities from which herbarium specimens of *L. fischeri* are derived. Newly discovered localities (A, B and C) are included. ○: Localities of *L. fischeri* recorded only in literature.

にも、生育していることが明らかになった。これとは別に、岩手県植物誌（岩手植物の会 1970）では、同県における唯一の産地である旨の註釈を附して、オタカラコウの産地として栗駒山北麓の一関市槻木平（Fig. 1, D）を、また山形県の植物誌（結城嘉美 1972）では、オタカラコウの産地として鳥海山を、トウゲブキの産地として飯豊連峰を、新たに記録している。しかし残念なことに、これらの記録の証拠となる腊葉標本は国内の主要標本庫（TNS, TI, KYO, SAP など）には収蔵されておらず、確認ができないでいた。そのため筆者は、東北地方における両種の分布の状況について再調査をする必要があると感じていた。

1985年10月、筆者の同僚である橋本保・岩科司・岩田ひさえの3氏が、栗駒山南麓の宮城県栗原郡花山村湯ノ倉（標高約 400 m, Fig. 1, C）のソバ畑の縁の湿った藪でオタカラコウを採取された。また筆者自身も1986年8月、焼石岳西麓の秋田県雄勝郡東成瀬村椿川（標高約 350 m, Fig. 1, A）、および栗駒山西麓の同郡皆瀬村大湯（標高約 450 m, Fig. 1, B）の、いずれも溪流沿いの落葉広葉樹林の林縁でオタカラコウを採取した。このうちA地点は、槻木平および鳥海山の山形県側よりもさらに北にあたり、オタカラコウの本州における分布の北端であると考えられる。飯豊連峰のトウゲブキについては、地元の小学校で教鞭をとっておられる小荒井実氏によれば、山形県側および福島県側の標高 1400 m ぐらいの尾根筋を中心に豊富に生育しているとのことで、これも確実である。飯豊連峰はトウゲブキの分布の南限にあたることになる。なお、槻木平と鳥海山のオタカラコウについてはまだ確認がとれていない。

以上のように、東北地方におけるオタカラコウとトウゲブキの分布域は、いずれも小山（1966）の時代に考えられていたよりは広く、また少なくとも平面図上では両者はかなり重なり合う。しかし、両種がともに分布している焼石岳・月山・朝日連峰・飯豊連峰のうち前三者においては、オタカラコウがブナ帯以下の溪流沿いなどの湿った所、トウゲブキが高山帯の尾根筋の比較的乾いた所と、生育域を全く異にしている。中でも高度の違いは大きく、現地で観察した限りでは両種の生育域は標高差にして 500 m ぐらいは違っているように思われる。一方、飯豊連峰ではオタカラコウが石転ビ沢沿いに梅花皮岳の標高 2000 m ぐらいの所まで上って来ているため、標高によるトウゲブキとのすみわけは認められない。しかし、前述のように生態的な好みが全く異なっているため、両種が混在することはないという。東北地方ではオタカラコウはふつう標高 300 m からせいぜい 1000 m ぐらいまでの所に多く、2000 m（飯豊連峰では高山帯にあたる）まで上るといのは珍しい。中部地方におけるカイタカラコウのような顕著な形態的分化こそ伴っていないものの、高山の環境に適應したタイプなのであろう。いずれにせよ、飯豊連峰におけるオタカラコウとトウゲブキの存在様式は、特殊な例として他からは除外して考えた方がよいと思われる。

以上述べてきたように、オタカラコウとトウゲブキの分布域は、焼石岳および栗駒山

の周辺から朝日連峰（または飯豊連峰）にかけて，“面で接して” いると考えるのが妥当である。現在見られるこのような興味深い分布パターンが、どのように形成されまた維持されているのかは、これら 2 種にカイトカラコウや大陸に分布するダットンタカラコウ *L. sibirica* Cass. などを含めたオタカラコウ類全体の分化の過程を明らかにするという脈絡の中で、解明すべき問題であると考えている。

なお、本稿で採用したオタカラコウの新産地 (Fig. 1, A, B, C) については、証拠標本 (A: T. Kato, No. 6801. B: T. Kato, No. 6802. C: T. Hashimoto, T. Iwashina & H. Iwata, Oct. 18, 1985) を国立科学博物館標本庫 (TNS) に収蔵してある。

最後に、腊葉標本の閲覧に便宜をはかって頂いた各標本庫、植物の採取を許可して頂いた関係官公署、飯豊連峰における植物の生育状況についてくわしく御教示頂いた小荒井実氏に、心からお礼申し上げます。(国立科学博物館 筑波実験植物園)

□初島住彦：改訂鹿児島県植物目録 290 pp. 1986. 鹿児島植物同好会（鹿児島大学農学部造林学教室），鹿児島。¥3500（送料とも）。1978年に刊行されたものの改訂版で，全体にわたって訂正，追加がなされている。クロタキバズラ科，フサザクラ科が新たに追加されている。凡例によると3019種を収録しており，前巻の凡例にある数より減少しているが，これはタクソンの数えかたの違いによるものだろう。ざっと数えたところでは，前巻より 270 種ほど増加している。約50の新学名，新和名が提示されているが，前巻から引き続いたものと，本巻で初出のものとの区別がつかない。新名の初出表はつけてほしかった。本巻初出の学名は新組合せをのぞいて20ほどあるが，裸名である。まだ活発な活動をしておられる著者のことだから，遠からず正式発表を期待する。（金井弘夫）

□秋山 優・有賀祐勝・坂本 充・横浜康継(編)：藻類の生態 i-viii+627pp. 1986. 内田老鶴圃，東京。¥12,800. 15名の執筆による17章から成る藻類の生態の総説書である。それぞれの章は主として執筆者の研究分野を中心とするレビュー形式ですすみ，藻類の生理機能と環境，海・湖沼・河川・汽水・土壌・海水中など生育を異にする藻類の生態・生産動態，分布と環境，藻類と他の生物の相互作用，藻類の生活史，藻類の群集の構造と多様性などを扱う。内容はかなり専門的で，最近の研究成果はよく盛られ，引用文献も豊富である。藻類生態学の最近の動向を知るのに便利であり，類書が日本に無いだけに，われわれにとっては有難い本の出現である。難を言えば，扱った藻群や紹介した研究方法に多少片寄りのあることである。続刊を期待したい。（千原光雄）